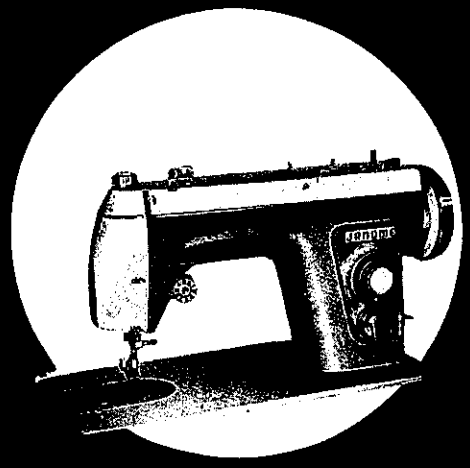
HL2－365型ジャノメミシン使用説明書



ジャノメミシンをお買い上げくださいましてありがとうございます

★お手許にお届けしたジャノメミシンはＨＬ2-365型です。ツートン・カラーの明るい色彩と、近代的感覚のあふれたデザイン、また各部に採り入れられた最新式の精巧な機構と装置は、ジャノメミシンのみのもつ大きな特長です。

★ジャノメミシンＨＬ2-365型を毎日調子よく、楽しくお使いになるためには、この使用説明書をよくお読みになり、一つ一つの機能をじゅうぶんにご理解くださるようお願いいたします。

★万一、ミシンにご不審や故障などが起きましたときは、お近くのジャノメミシン直営支店へご遠慮なくご用仰せつけくださいませ。製品には10カ年の責任保証はもちろん、あとあとのサービスに万全をつくしてご奉仕申し上げております。

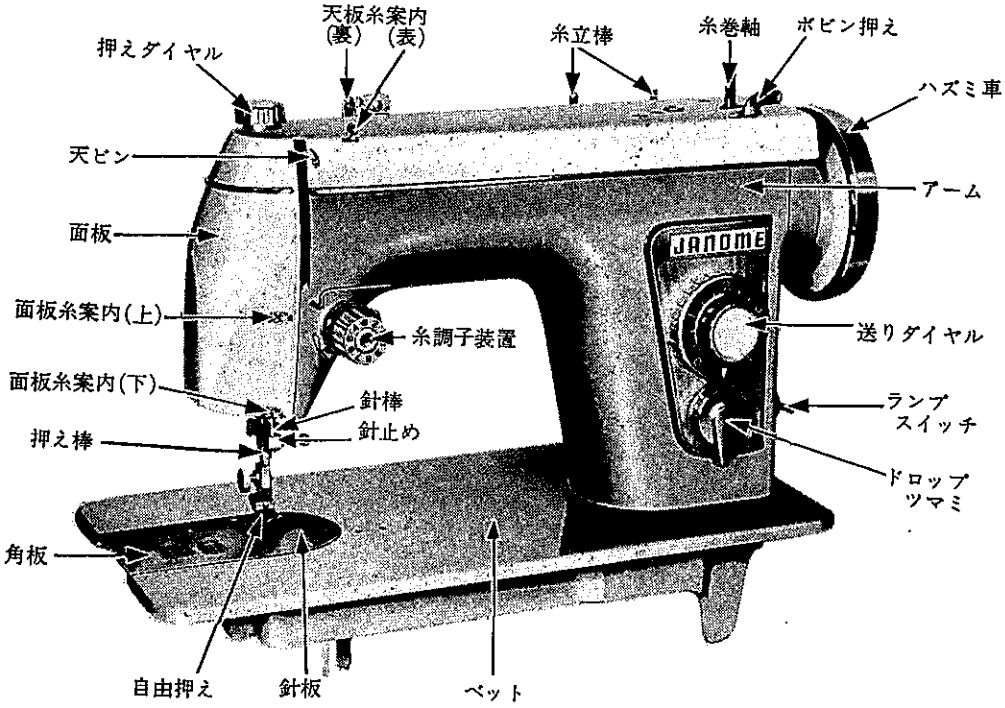
★365型ミシンのベッドには、このミシンの機械番号がとりつけられています。それによって会社にはお宅様のミシンの製造月日やその機能の特性が明細に記録されておりますので、万一故障や部分品のお取替の場合でも、“機械番号”さえお知らせくだされば、その機械の様式や部分品について、すぐしらべてご通知申し上げることができます。

★365型ミシンには下の付属品がついています。

ボビン	4個	三ツ巻	1個
ミシン針（ケースつき）	6本	油差し（ミシン油入）	1個
ネジ廻し（大小）	2個	足台（ＴＳ型のみ）	1組
定規1組	1個		

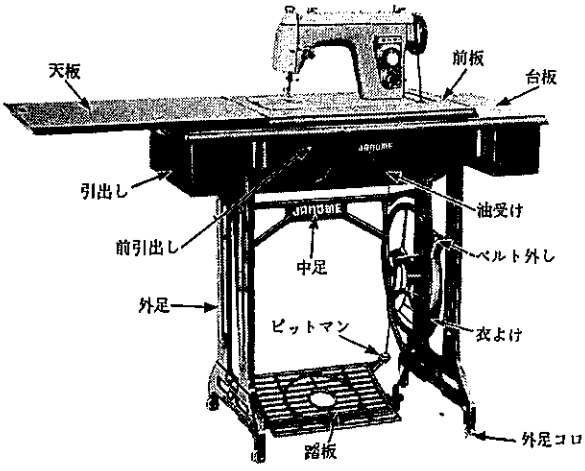
以上のほかに『ジャノメミシン365型使用説明書』が1冊ずつ添付されております。

― 頭部の名称 ―



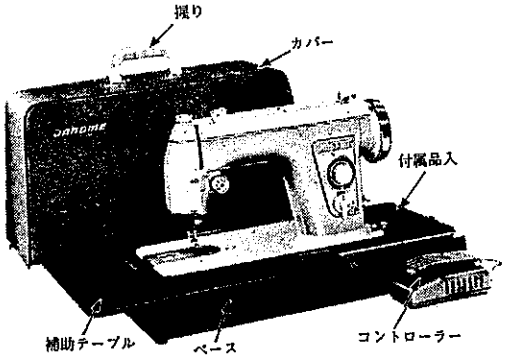
― 足踏三個引出形 ―

365 型 TS



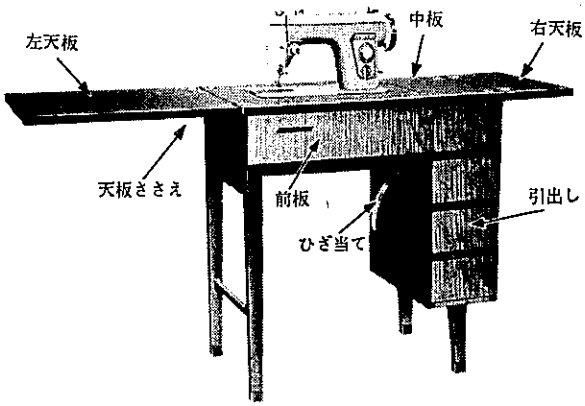
― ポータブル形電気ミシン ―

365 型 EP



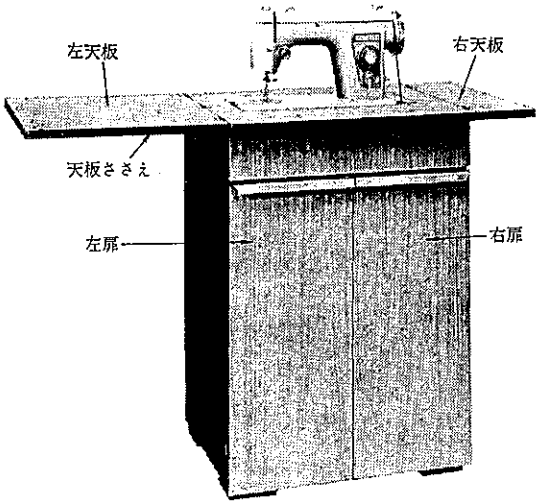
― デスク形電気ミシン ―

365 型　E C



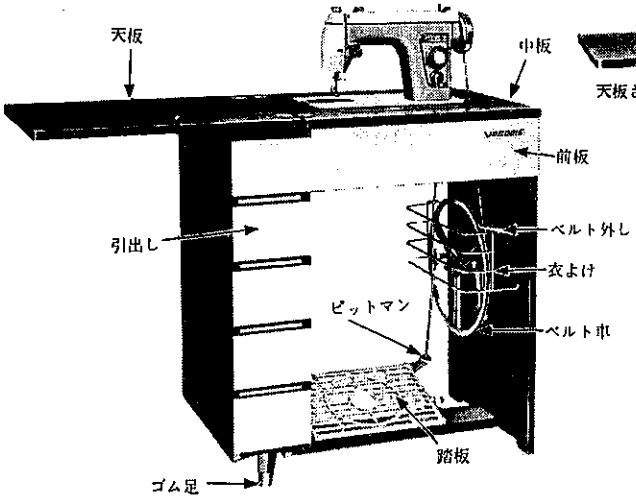
― ハイライン キャビネット ―

365 型　E H. T H



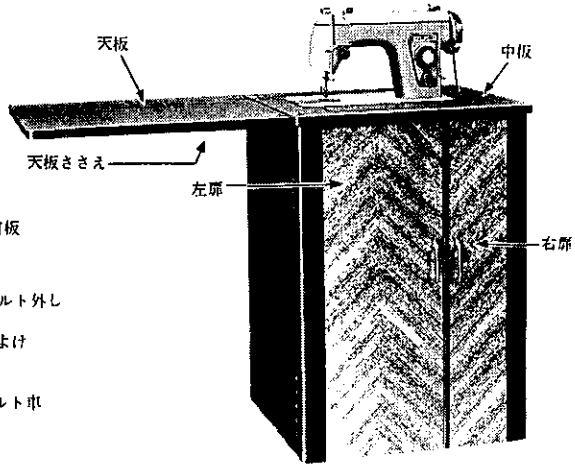
― 足踏デスク形 ―

365 型　T C



― 足踏キャビネット形 ―

365 型　T B



目　次

正しいミシン裁縫の学び方と心得…… 8頁
頭部の取りつけ方……10
ベルトの掛け外し……11
ハズミ車の扱い方……11
足踏の練習……12
針の取りつけ方……12
縫い方の練習……14
ボビンケースの取り出し方……16
ボビンに下糸の巻き方……17
正しい糸の巻き方……18
ボビンケースの下糸の入れ方……19
中ガマにボビンケースの入れ方……20
上糸の掛け方……21

下糸の引き上げ方……22頁
縫目加減と送り調節……23
縫い方の実際……24
糸調子の調節……26
糸取りバネの強さの調節……28
ししゅう縫い装置……29
押え強さの調節……29
照明装置の使い方……30
注油と掃除……31
付属品の使い方……33
三ツ巻の使い方……34
カマの分解手入れ法……35
ミシン故障の原因と修理調整法……37
縫物の布地と針と糸の関係……39

正しいミシン裁縫の学び方と心得

糸の通った針で布を縫いあわせるというもっとも簡単な和裁縫でも、正しい順序通りの縫い方をおぼえなければ、一枚の下着を仕上げることもできません。ミシンは手縫というこのお仕事を、機械的にもっとも早く美しく仕上げるためにつくられた精密機械です。

したがってミシンの種類も、その用途によって多種多様に分れております。一般に多く使われているのを家庭用といっていますが、これは家庭用以外には使用できないということではなく、一般に広く普及されている意味ですから、もちろん職業用にも使用することができるのです。

家庭用ミシンは足踏みで、ふつうは1分間600～800針の運針を標準にして廻転いたします。これにミシン専用のモーターを取り付けますと、毎分1200針程度の廻転が可能になります。

★ミシンは家庭用の標準型でも三百数十種にのぼるたくさんの部品が精密に組合わされて製られています。ミシンに付属している一本のネジも、小さな油差しの穴でも、それぞれ大切な役割を持っているのです。

ミシンをあなたの思いのまま自由に使いこなしていただくためには――

第1に……**ミシンの各分品の名称と性能をよく知っておくこと**（本書の巻頭にある「名称図」をごらんください。）

第2に……**正しい足踏の練習**　足踏ミシンは両足で「踏板」をふんで針を運ばせますから、自由自在の運針はまず、足踏の練習からはじめます。

第3に……**正しい糸の通し方**　上糸の正しいかけ方、下糸の正しい巻き方や納め方をよく覚えていただきます。

これから先は「縫い方」に習熟していただき、それを応用していろいろと新しい洋装や、ミシン手芸、刺繍

にまで進んでいただきます。

★本書には、ミシン使用法や縫い方の基礎から、さらにミシンの手入保存法、簡単な修理調整の方法まで、わかりやすくていねいに記述してありますからどんな初めての方でも、本書の順を追ってお学びになればかならず立派な技術者になり、ミシン裁縫が短時間で上達されます。

ＨＬ2-365型ジャノメミシンには、次のように各種の最新式装置が取り付けられています。

1、**縫調子はリンク式天ビンによって**、どんな高速度で縫っても好調を保ち、しかも摩擦音や振動がなくいたって静かです。

2、**縫目調節はダイヤル型で**縫目の長さが正確に示されます。

3、**返し縫装置は**縫目調節のダイヤルを押して行ない操作が軽快簡便になりました。

4、**照明装置は面板取付式となり**、針もとを明るく照らし夜間のお裁縫に最適です。面板はヒンジ開閉式になりましたので、注油およびランプの交換が便利になりました。

5、**押え圧力の調節はダイヤル型で**数字に合わせることにより、布押えの強さが調節でき合理的になりました。

6、**刺繍縫装置（ドロップフィード）**はアームに取り付けられたツマミの数字を合わせるだけで、薄物縫い、刺しゅう縫いの調節ができ、その上ベット面が広くなりお裁縫がやり易くなりました。

7、**角板は開閉に便利なヒンジ式で**、ボビンケースの格納、取り出しが非常に便利です。

8、**カマには当社独特の掃除器（クリーナー）**がついていますので、カマ部を掃除する必要がほとんどありません。

頭部の取りつけ方

本社の直営支店からは、ミシンを全部組立てたままでお届けしますが、遠隔の方で荷造りして工場から発送する場合は、**頭部と足部テーブル**を別々にお届けいたします。

☆ミシンの部をテーブルに取り付ける順序は、

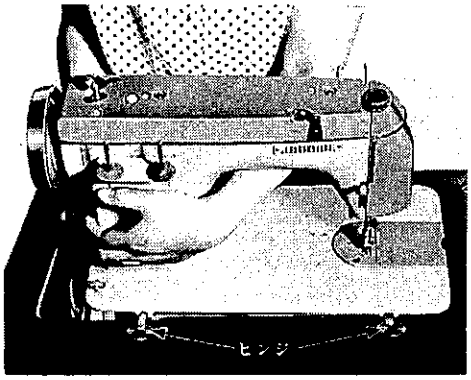
1、 テーブルのフタの鍵をあけて天板を開く。

2、 テーブル中板の中央に取りつけてある2個の金具（**ヒンジ**）を、頭部ベッドの前端にある穴に差込みます。（第1図）

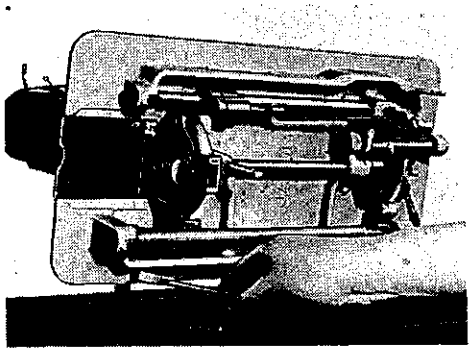
3、 次にミシンベッドの裏側にある**ヒンジ止ネジ**（第2図）をネジ廻しでしっかり締めて取りつけ、頭部を前板の上に据えます。

4、 最後にハズミ車の内側にある溝部にベルトをかけて取りつけが完了します。

（注） ミシンの頭部は約13kgの重量があり、手先では重くて取りつけが安定しませんから、第1図のように頭部をかかえて、お取りつけください。



第 1 図



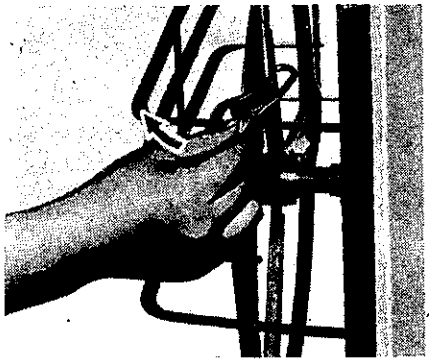
第 2 図

ベルトの掛け外し

足部のベルトを掛ける場合は、ベルト車の右側にベルトを垂らし踏板をふんで、ベルト車を手前に廻わせばベルト車の溝にある突起がベルトを引っかけて、たやすく掛かります。

★ベルトが掛かると足をふむにつれて機械が自然に動くようになります。

★ベルトをはずす場合は、ベルト車のちょうど膝の高さのあたりにベルト外しがついていますから（第3図参照）ハズミ車を手前に廻転しながら、左方向（自分の足の方向）に引くと、ベルトはらくにはずれます。



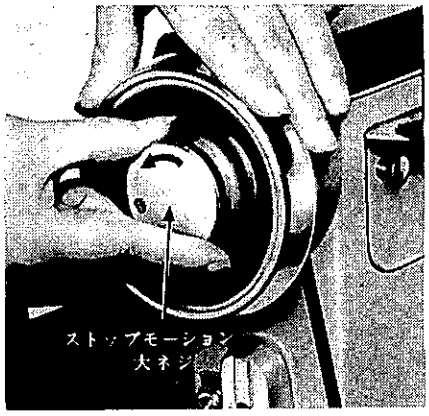
第3図

ハズミ車の扱い方

★ハズミ車（第4図）はいつも手前の方に廻るように同じ速度でムラなく動くようになるまで足踏の練習をしてください。

★足踏の練習や下糸を巻くときには、ハズミ車を左手で押えながら、右手で中央のストップモーション・大ネジを手前（第4図）の矢印の方向へ廻せばハズミ車は運針に関係なく、単独に空廻りします。

★機械を運転する場合は、ストップ・モーション大ネジを元通りに右に廻して締めつけます。



第4図

第５図

第６図

足踏の練習

椅子があまり低いと踏板がふみにくく、力が入りませんから、腰をかけて腿が水平になる程度の高さのものに、浅く腰かけますと長いお仕事にも疲れません。

★**坐り方**は、ご自分の身体の中心線と針棒の中心線とピッタリ合わせて、あまりうつ向きにならないように自然の姿勢をとります。

こうした正しい坐り方をしますと針の進むのがよく見え、左右の手も自由に使えます。

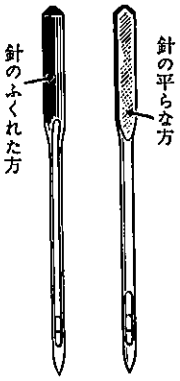
★両足は踏板から極端に足の指先やカカトが出ないように、左右どちらかの足を前後にのせます。（第６図）

★ハズミ車を右手で軽く手前の方に廻しますと、踏板が動きはじめますから、その運転につれて前足の爪先と後ろ足のカカトに力を入れるようにして交互に踏んでください。

（注意）◇ハズミ車を逆廻転させないよう、かならず手前の方に廻すこと。

◇ベルトが新しくて掛かりにくい時は、指先をベルトに添えて踏板をふむとたやすく掛かります。

針の取りつけ方



第７図

ミシン針は、縫物の厚い薄いや硬さ柔らかさなどによって、それぞれ適当な太さの針を用います。（針の太さの番号は39頁または角板表面をごらんください）

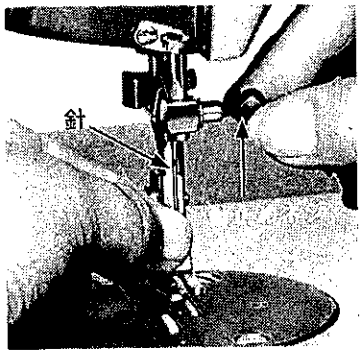
★まず、ハズミ車を手前の方に廻して、針棒が上りきったとき止め、その先の針止ネジ（第８図）をゆるめます。

★針には胴の部分が平らにけずられた方と、丸くふくらんだ方とあります。（第７図参照）

★針を左手に持ち、平らな方を右側に向けて針棒に一杯にさしこんでから、針止めネジを堅くしめつけ、正しく固定させます。（第８図）

（注意）◇針が曲っていては完全に縫えません。針が完全かどうかを調べるには、平らなガラスか板などに針の平らな側を当て、明るいところで横からすかして見ます。完全な針は針の下側が平均に明るく針先まで直線に見えます。

◇針の太さの番号は針の基部のふくらんだ側にきざまれています。



第８図

縫い方の練習

初めてミシン裁縫をなされる方は、"足踏の練習"が十分に出来ましたら、次には

紙を用いて、直線縫い

円縫い、角縫いの練習

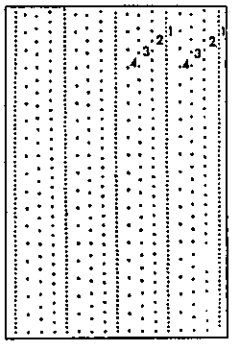
をはじめていただきます。実際の裁縫に当っては縫筋はじょうずにたどらねばなりません。

そのためにこの練習を本縫にかかる前に十分にこころみてください。

★まずミシンには上糸をかけず、ボビンケースを取り出しておきます。16頁（第11図参照）

★新聞紙かハトロン紙など手ごろの紙を半紙程の大きさに切り、定規（じょうぎ）と鉛筆で（第9図）のような直線をならべて引きます。

第 9 図



直線縫いの練習

この紙を布地と見なして線の上を針が直すぐにたどれて、細かい目も粗い目も曲りのないよう正しく縫える練習をします。

（9図は1が細かい目、順々に粗い目を示します）

★縫う時は、紙の端を送り歯の上におき、右手でハズミ車を手前に廻して、針先を鉛筆で描いた線の端につき刺してから、押えを下ろして、この線の上を前にのべた要領で縫運転をはじめます。

★針目通りに穴があきますから、紙をしらべてみてまっすぐに縫えるようになるまで練習します。

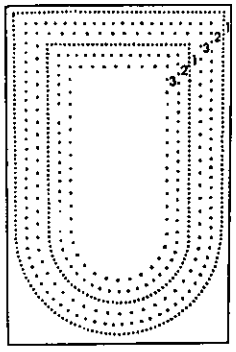
★これを繰返して、次には（第10図）のように線を描いた紙でこころみてください。

このとき、縫目の曲り角のところは必ず針が深く刺さっているときに押えを上げて、針を中心として紙を廻し、ふたたび押えを下ろして直縫をたどります。

★また円を縫う場合は、左手を紙の上に軽く置き、右手で紙を廻わして曲線に縫います。

★これらの練習が大体終りましたら、線を引かずに直線縫いまたは好みの曲線縫いも自由に縫えるように練習いたします。

第 10 図



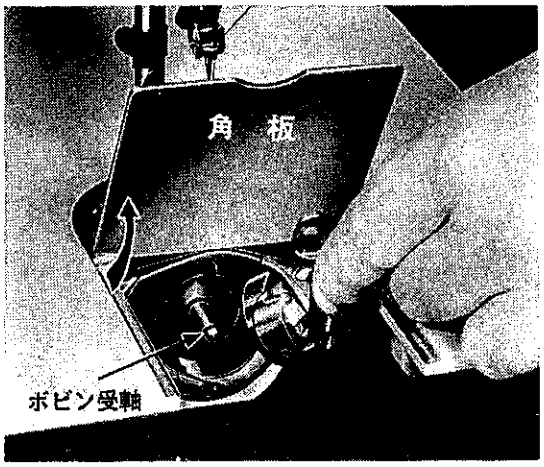
円縫いの練習

★この練習を何回も繰返して、運転の速度と、縫い物の扱い方を、えとくしていただき、次にいよいよ上糸と下糸をかけたじっさいの裁縫に進みます。

（注意） 縫い物を用いないで糸をつけたまま運転しますと、『中ガマ』に糸がからまり故障の原因になります。

また逆廻転しますと、上糸を切るか、または『中ガマ』と『大ガマ』の間に糸がくい込み、ミシンが動かなくなりますからよくご注意ください。

ボビンケースの取り出し方



第 11 図

ボビン・ケースは針板の下のカマの中にあって、ボビンを納める部分です。

ボビンケースを取り出すには……

★まずハズミ車を手前に廻して、針を最上部に上げておきます。

★角板を上方に開き（第11図）、左手の人さし指でボビン・ケースのつまみ（第11図参照）を引きおこし、人さし指とおや指で軽くつまんで、左方に引くと、カマから取り出すことができます。

（注意） 針が最上部に上っていないと、針につかえてボビンケースが出にくくなります。

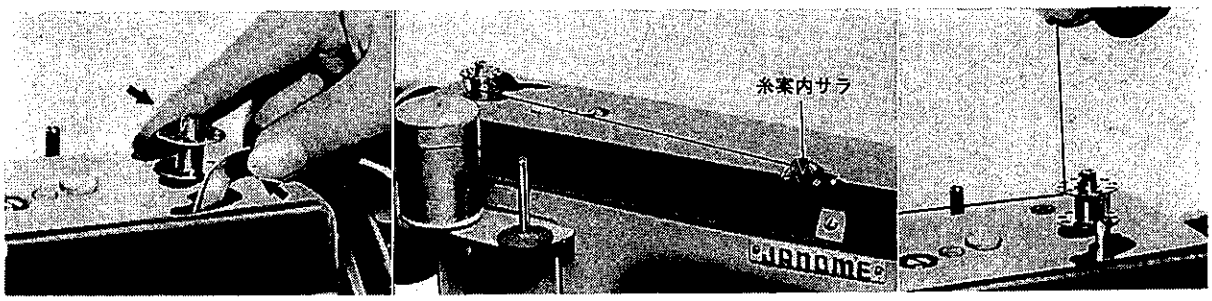
★つまみをおこして持っている間は、つまみの裏側で爪がボビンを押えているため、ボビンケースを下向にしても、ボビンは落ちません。

★取り出したらつまみを放して、ボビンケースの口を下向にすれば、ボビンはぬけ出てきます。

ボビンに下糸の巻き方

1. 左手でハズミ車をおさえ、右手でストップモーション大ネジを手前に廻してゆるめます。（第4図）こうしますと、ハズミ車と内部の機構の連結がはなれて、ハズミ車だけがから廻りします。
2. ボビンの切欠き溝を糸巻軸のバネに合わせてはめこみます。
   そして糸巻き軸とボビン押えを同時につまむと、押えはボビンにはまります。（A）
3. 糸巻きを糸立棒にさして糸を引出し糸案内のサラの間を下から上に通します。（B）
4. 糸の先をボビンの上側の縁金の穴に内側から通し、この糸の先を右手でつまみ、まっすぐに引っぱりながら、ハズミ車をから廻りさせます。（C）
5. 右手に持った糸は、ボビンに少し糸が巻けたら強くひっぱって切ります。
6. ボビンに糸がいっぱいになりますとボビン押えが自動的にはなれますからミシンの運転をとめボビンを外します。

第 12 図 （A）　第 12 図 （B）　第 12 図 （C）



正しい糸の巻き方

ボビンには糸が平均に巻かれるように調節されています。もし万一、糸が一方に片寄る場合には**糸巻軸のすぐ左側にあるフタを外して**、ネジ回しで**糸巻台板調節ネジ**を廻してください。糸の巻き方は平均に正しく巻かないと、糸が切れたり正しい縫目ができません。(第14図)

A

不良な巻き方

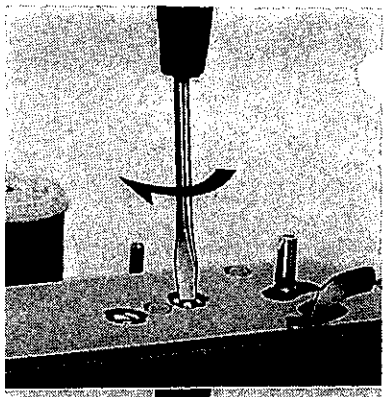
Aのように巻かれた時は、**糸巻台板調節ネジをわずか右に廻します。**(A′)

B

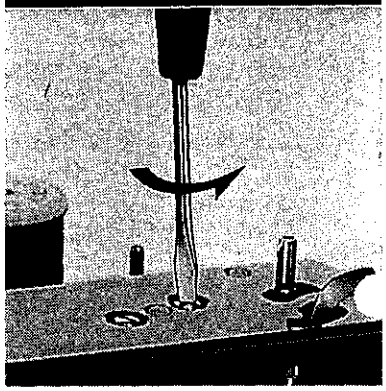
不良な巻き方

Bのように巻かれた時は、**糸巻台板調節ネジをわずか左に廻します。**(B′)

第 13 図



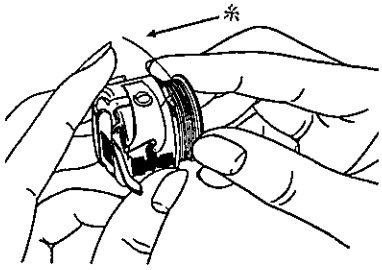
第14図 A′



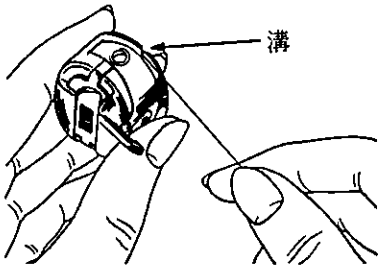
第14図 B′

ボビンケースに下糸の入れ方

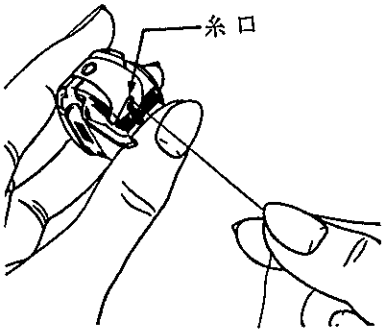
1. 糸が**手前から向う側**に巻けている向きにボビンを持ってボビンケースに納めます。



2. ボビンケースの端の溝に糸を通します。



3. さらに調子バネの下を通してボビンケースの糸口に糸を通します。



第 15 図

中ガマにボビンケースの入れ方

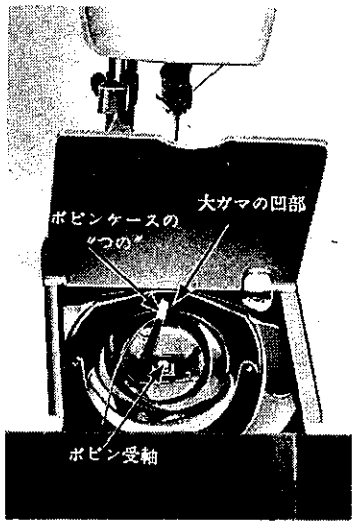
中ガマにボビンケースの入れ方は、（16頁）の「ボビンケースの取り出し方」と同じように、まずハズミ車を廻して針棒を最高に上げ、角板を開けておきます。

★ボビンケースに糸が通りましたら、糸の端を10センチくらいボビンケースの〝つの〟に向って、左側にたらして、そのまま左手の人さし指と、おや指でケースのつまみをはさんで持ちます。（第11図参照）

★ボビンケースの〝つの〟が大ガマ上部の凹部にはまるように、中ガマの中央のボビン受軸にピタリと落ち込むまで奥の方へいっぱいにさし入れて、つまみをはなしてください。（第16図）

★ボビンケースから引き出してある糸の端はケースの〝つの〟より向って左側に、そのままたらしておいて角板を閉めます。

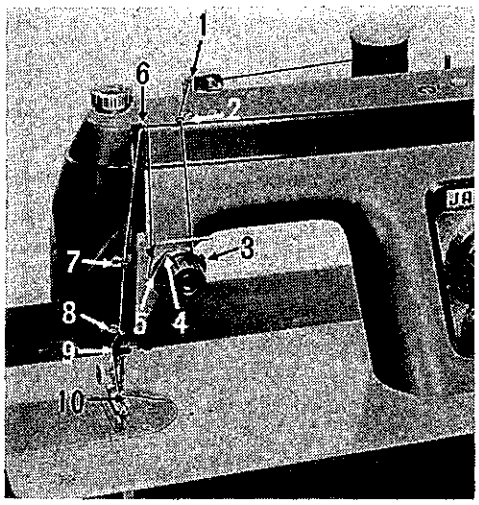
（カマ部の名称図は36頁にあります）



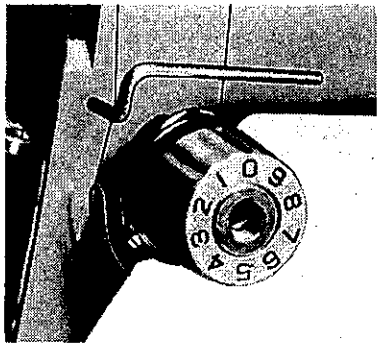
第 16 図

上 糸 の 掛 け 方

上糸の掛け方を間違えると、裁縫ができませんから、掛け方の順序をよく覚えておいてください。
★最初にハズミ車を手前に廻して、天ビンを最高部へ上げておきます。
★糸巻をアームの糸立棒に立て、糸口が手前側から出るように糸を引出し、下図の順に掛けます。



第 17 図



第 18 図

1. 天板糸案内(1)(2)に通した糸を糸調子皿(3)の間を右から左に糸を廻しながら、糸取りバネ(5)といっしょに調子皿糸案内くぼみ(4)に糸が引っかかるまで引上げます。

（注意） ◇糸調子皿は２枚に重なっていますからその間に糸を入れます。

2. 次に糸を天ビンの穴(6)と面板糸案内(7)(8)に通し、針棒の糸案内(9)に通して、最後に針の穴(10)に左から右に通します。

3. 糸の端は針から10センチ程度引き出しておきます。

下糸の引上げ方

上糸の掛け方、下糸の巻き方、ボビンケースの入れ方などの練習が終りましたならば、次には下糸を針板の針穴から引き上げていただきます。

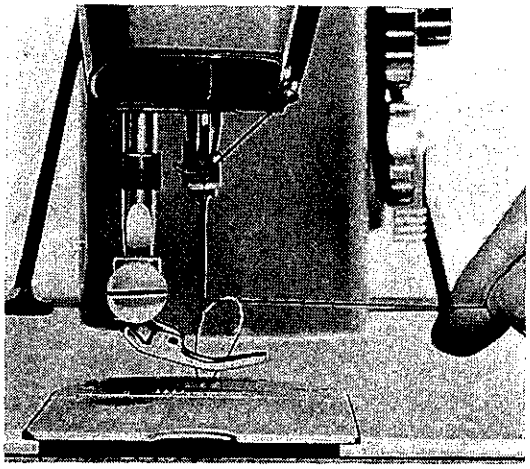
— 下糸を針穴から引き上げる順序 —

1. 左手で針から出ている**上糸**の端をつまみ、糸をゆるめて持ち、右手で**ハズミ車**を手前の方へ廻します。
2. 針は一度下って、ふたたび上へあがりますから、針が上りきったところでハズミ車を止めて、左手で**上糸**を引くと、上糸は**下糸**をとらえて上糸が針穴から輪になって出てきます。(第19図)
3. 下糸が上りましたら、上糸と下糸をそろえて**押え**の割れ目の間から糸がたるまぬ様に軽く引き乍ら向う側におきます。

★これでいよいよ糸の準備がととのいました。練習用の裁縫には、新しい布をお使いにならなくとも使い古した敷布や浴衣などで結構です。

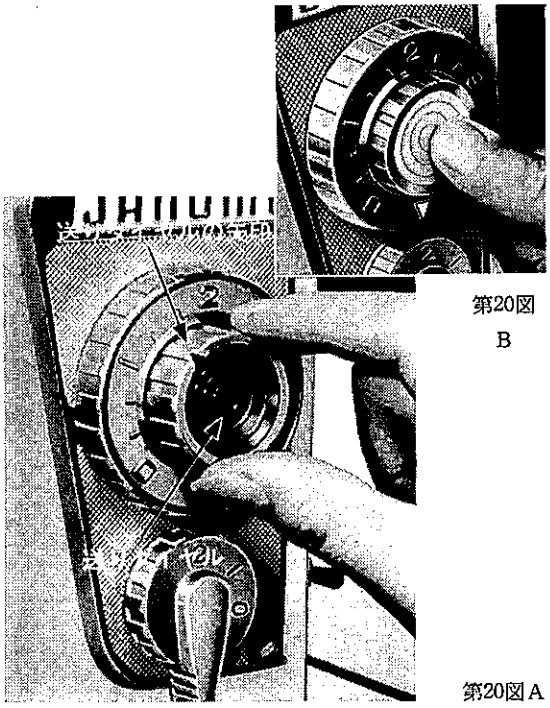
(注意) ◇下糸を引き上げるとき、上糸をあまり強く引っぱっていると、下糸を引き上げないことがありますから、針と指との間で糸が多少ゆるむ程度に軽く持って下さい。

◇上糸の端を針の右側の方で引くと、下糸を引き上げやすいのです。



第 19 図

縫目加減と送り調節



第20図 B

第20図A

— 普通縫いの場合 —

★**送りダイヤル**（第20図A）を廻して、**送り目盛**の数字に矢印を合わせます。

数字が大きいほど縫い目の長さは長くなります。

次にハズミ車を廻して運針すれば、**普通縫い**ができます。

— 返し縫いの場合 —

★**送りダイヤル**を押せば、普通縫いと同じ縫い目の**返し縫い**ができます。(第20図B)

ダイヤルをはなせば普通縫いにもどります。

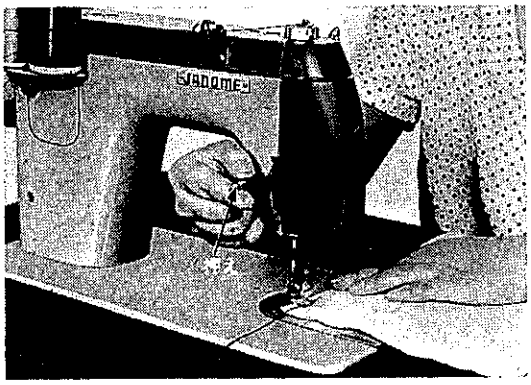
(ダイヤルは必ず奥までいっぱいに押すようにしてください)

縫い方の実際

1. 縫いはじめ

22頁の「下糸の引き上げ方」でのべましたように上糸と下糸を押えの向う側へ引き出しましたら、布地を押えの下に置き、縫いはじめます。

★左手で上下の糸の端を軽くつまみながら、右手でハズミ車を静かに手前へ廻して、最初の一針を布地の縫いはじめの位置に突きさします。



第 21 図 (A)

★次にアームの下から右手で押えを下ろし、糸をつんだ左手をはなして、ハズミ車を廻して踏板の運転をいたします。

(注意)

◇最初の一針を縫うとき、上下の糸を左手でつまんでいれば上糸のくい込むことはありません。

◇送りと押えの作用で、自然に布を送り出しますから、布を手前に引き動かしたり、向う側へ引っぱったりして、機械の運転を助けようとしてはいけません。そうすると針が曲ったり折れたりします。両手で布の方向を調節するだけでよいのです。

2. 縫物の角(かど)を縫うとき

★角(かど)を縫うには、紙で練習したときと同じ要領で曲り角にきたら、ハズミ車に手をかけながら針が布に深く刺さっているときに運転を止めます。

★押えを上げて、針を中心にお好きな方向に布を廻再び押えを下ろして縫いはじめます。

3. 縫い終って布を取り外すとき

縫い終って運転を止めようとするときは、ハズミ車に手をあてて、天ビン(第17図の6)の上りつめたところで運転をやめ、押えをあげます。

★縫い物は必ず左斜め向うへ、静かに引き、押え棒にとりつけてある糸切か、または小鋏で上下の糸を切ります。この時上下の糸は次の縫いはじめの用意に10センチほどのこしたままハズミ車を回して針が最も上った位置にします。

★縫い終りは、そのままでは縫目がほつれますから、糸を切る前に23頁の返し縫いの項で説明した返し縫いを、止め縫いとして用いて下さい。縫い終りまで来たら、送りダイヤル(第20図)を押して、縫い目をもどせばよいのです。

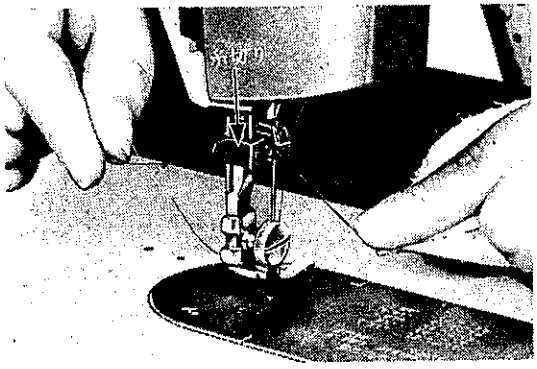
(注意)

◇不注意にうっかり糸を手前や横に引きだすと、針が曲ったり折れたりします。

◇運転を止めるときは、必ずハズミ車に手をあてて止め、逆廻りをさせてはいけません。

◇天ビンは最上部に上げてから縫物を引き出すこと。天ビンが下っている時は上糸はまだ中ガマに掛っており、上糸はなめらかに出てきません。

◇布の端で縫い止める時は布の終りより先へ縫いこしてはなりません。布の終る間際で運転を止めないと糸が中ガマにからむことがあります。



第 22 図

糸調子の調節

★ミシンは1本の糸で縫う手縫いとちがって、上糸と下糸がからみ合って縫い合わされてゆくものですから、この2本の糸調子が縫い上りのうえに大きな影響があります。

★ミシンがつくる本縫いの縫い目は、針から来る上糸と、ボビンから来る下糸が、縫い物のまんなかで**鎖り形（くさりがた）**になって出来るものです。

★正しい縫い目は、（第23図A）のように、ちょうど布の中間で上糸と下糸が交叉しています。

★**上糸の調子が強すぎると**（第23図B）のように、上糸は縫い物の上側に一直線となり、下糸が引っぱられて表の縫い目にあらわれます。

★反対に上糸が弱く**下糸が強すぎると**、下糸が布の裏側に一直線になり（第23図C）、裏側へ上糸が引き込まれて裏の縫い目ができなくなり、どちらも体裁も悪く縫い目が弱くて、ほころびや、また布に縫皺（ぬいしわ）がよったり、上糸の切れる原因になります。

第 23 図

正しい調子の縫い目

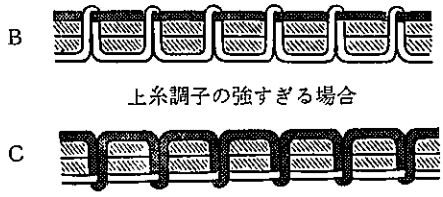
完全な縫い目は上糸の調子だけでなおせる

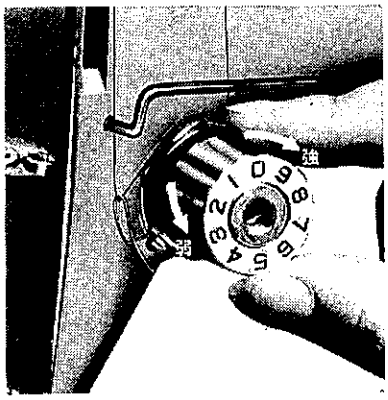
ミシン裁縫の良し悪しは、上糸の調子で決まります。正しい縫い目は、大てい上糸の調子をなおせば完全になるものです。

★**上糸の調子を強くしたい場合には……**

（例えば第23図Cのような縫目になった時）**上糸調節器の調節ツマミ**（第24図）を、**右の方**に廻せば上糸の調子が強くなります。

第 23 図





第 24 図

★また**上糸の調子を弱くしたい場合は……**

（縫目が第23図Bのようになった時）その反対の左の方に廻します。

◇以上のようにして調子が出ました時は、上向きの数字を記憶しておいていただけば、もし他の方が**調節ツマミ**をあやまって廻しても、前の数字に合わせますと正しい縫い調子が得られます。

下糸の調子

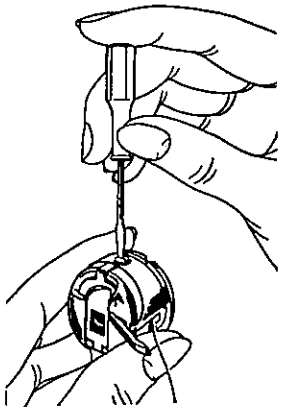
すべて機械の各部は、会社からお届けするときに完全に調整が出来ておりますし、実際に使用の場合も前にのべた通り、だいたいは上糸調子で加減が出来るものですが—

★何かの場合で……下糸の調子を加減する必要のあるときは、ボビンケースの外側の、**糸調子バネの小ネジ**で調節いたします。

（第25図）

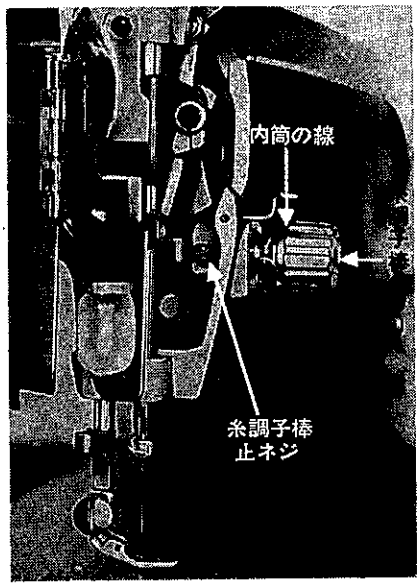
★小ネジを右へ廻して締めれば、調子は強くなり、左へ廻せば弱くなります。

★下糸の調子…は、ボビンケースを左手に持ち、右手で糸を引き出して見て、ちょっと手ごたえがあるという感じに下糸が出てくるのがよい調子なのです。

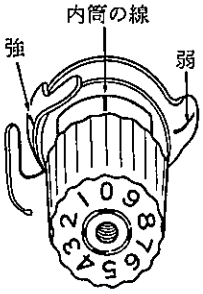


第 25 図

糸取りバネの強さの調節



第 26 図



★普通の厚さの布地を縫うときは、糸取りバネの強さの加減は必要でありませんが、もし調節する必要がある場合は次のようにいたします。

1. 極薄物、ナイロン地、刺繍縫いなどの場合——糸取りバネを弱くします。
2. 極厚物、ビニール地、薄ゴム地等の時は——糸取りバネを強くします。

★この調節の方法はまず、面板を開き糸調子棒締ネジ（第26図）をゆるめます。

★調子棒のワリに小ネジ廻しを差し込み、糸取りバネを弱くする場合は、右に廻し右側の赤線に、強くする場合は、左の方に廻転させて、左側の赤線と内筒の線が合致したところで糸調子棒の締ネジを締めて固定させます。

★この強弱の調節によって、裁縫がおわったら必らず前の要領で、内筒の線を上向にもどし糸取りバネの強さを標準にしておきます。

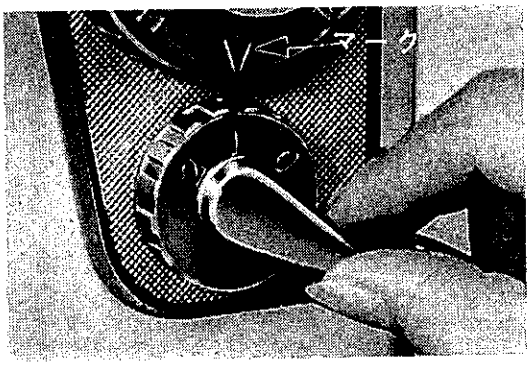
刺繍縫い装置（ドロップフィード）

刺繍縫い装置（ドロップフィード）は、アームに取付けられたツマミによって送り歯を上下に動かします。

★普通縫の場合は、ドロップツマミの数字２を上の三角マークに合わせます。薄物縫いなどで特に送り歯の出方を少なくする必要のあるときは、数字を１に合わせます。

★ミシン刺繍をする場合は、数字を０に合わせて送り歯を針板から下げます。

第 27 図



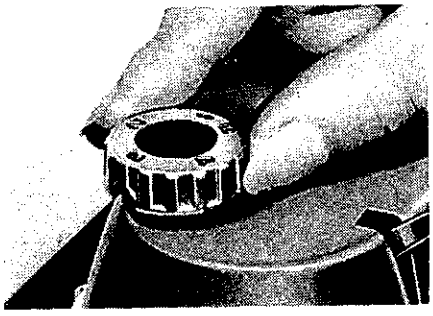
押え強さの調節（ダーナー）

押えの圧力は縫い物の種類によって強弱を加減しますが布地を送るのにじゅう分な圧力で出来るだけ弱い方がきれいに縫い上ります。

★圧力を強めるには押えダイヤルを右廻しして天板の○印に数字の大きい方を合わせます。
弱めるには逆に数字の小さい方に合わせます。

★普通縫いでは大体目盛３で使用し、厚物縫いでは目盛５、薄物縫いでは目盛１に合わせます。

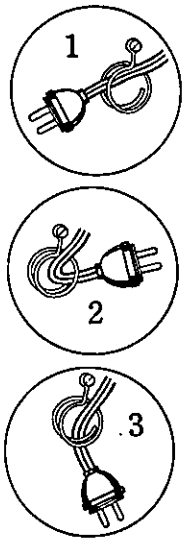
第 28 図



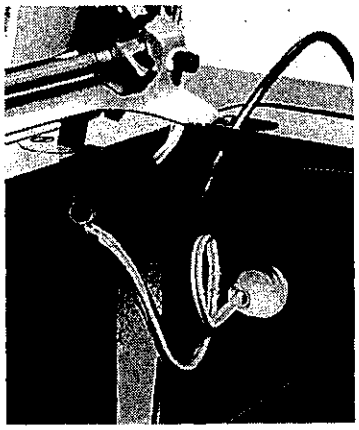
照明装置の扱い方

明りの充分でない場所や、夜間などにミシンをお使いになるとき、縫目の附近を明るくするために照明装置が面板内に装置してあります。

1. ベッドの下から出ている電気コードを第29図の①②③の順序でテーブルの金具に通します。
2. 同じくコードをテーブル油受の内側にある差込口にねじ込みます。(第30図)
3. 次に付属コードの差込みを油受外側の差込口に入れ電灯線の電源につなぎます。
4. ランプはハズミ車の下のボタンスイッチを押せば点滅します。(第31図)



← 第29図

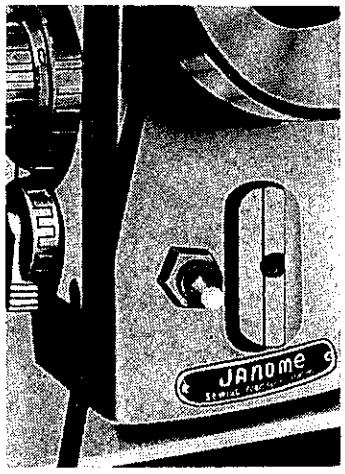


← 第30図

(注意)

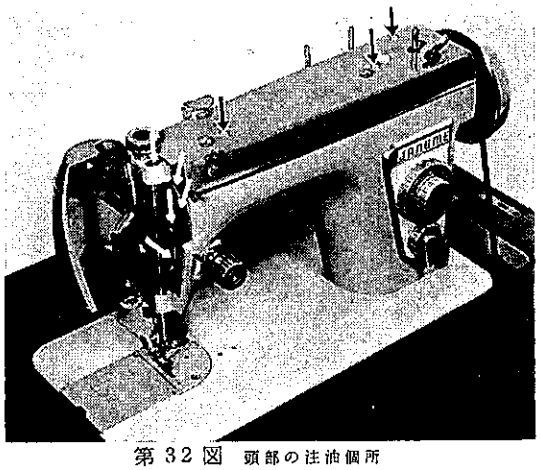
◇電球が切れて取り替えるときは、面板を開けて電球を左へ廻して取りはずします。

◇電球は照明用100Vを使用します。



→ 第31図

注油と掃除



第32図 頭部の注油個所

あなたの大切なミシンは、つねに手入れさえ行き届いていれば、いつでも素晴しい性能を発揮し、一生お使いになれますから、お仕事の終った後は、絶えず注油と掃除に注意をしていただきます。

油の悪いものや、不適当なもの(植物性の食用油等は不可)を使えば、油が粘って運転が渋りミシンのためには良くありませんから、油はつねに"ジャノメミシン油"をお使い下さい。

★ミシンを終日お使いになる方は、毎日注油と掃除をする必要があります。また1日に数時間しか使用されない方や一般のご家庭では、1週間に1回の注油と掃除で十分です。

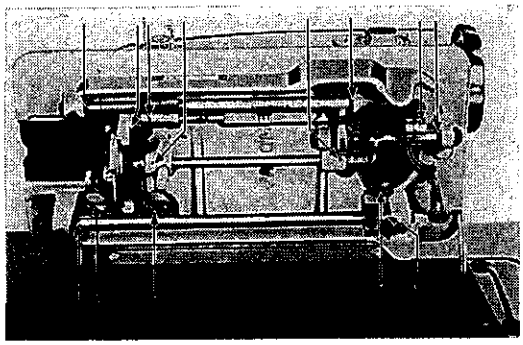
(注　油)　★まず布切で機械についている古い油をよく拭きとり、頭部は第32図の矢印の個所へ注油します。ミシン油は一カ所へ一滴か二滴ぐらいさしてください。

★ 針棒の個所へ油を注すには面板を開いて行ないます。すべて注油のときは、油差しの口を油穴へ十分に突込んで注してください。

(注意)

◇注油や掃除をするときは、必ず針を取り外して行なってください。

◇永らくミシンを使わない場合や、厳寒の時節には油が固って廻転が重くなりますから、各注油部分に石油か揮発油を多目に注し、数分間早く廻して油をぬぐい去ってから、ミシン油を各個所へお注し下さい。



第 33 図　ベット底部の注油個所

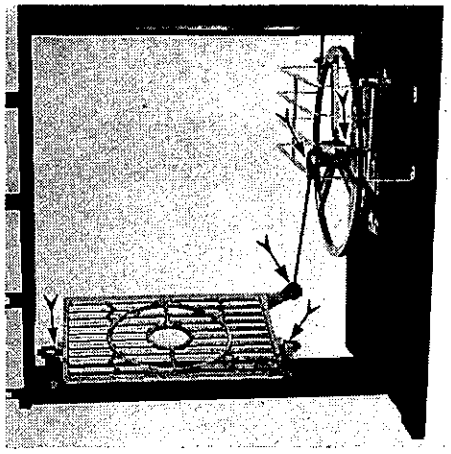
★ベットの底部裏面は、頭部をたおして（第33図）の矢印の個所へそれぞれ注油いたします。

★足部の注油は、ときどきで結構ですが、ベルトを外し、踏板を踏んで動き擦れる部分（第34図矢印）へ油を注します。

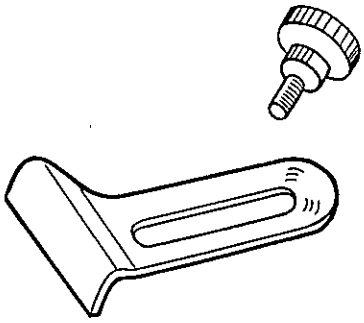
（掃　除）　★カマの掃除は大ガマフタをはずし（外し方は35頁参照）中ガマを外して大ガマの溝の中の糸屑やゴミなどをきれいに掃除した後、油をしめした布で溝の中や中ガマを拭いてください。

★送り歯の掃除は針板締めネジをネジ廻しで取り、針板を外して、送り歯の糸屑やゴミを歯ブラシで除きます。

第 34 図　足部の注油個所



付 属 品 の 使 い 方

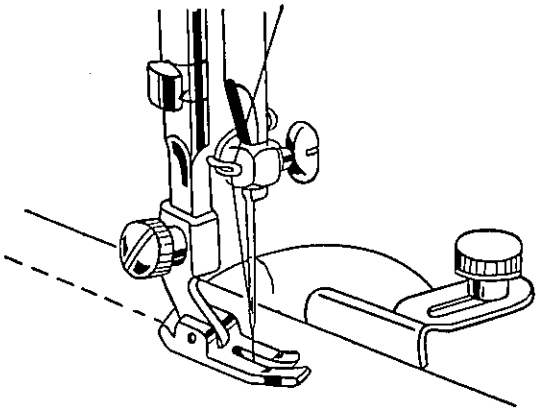


定 規 の 使 い 方

定規は、直線縫いをする場合に使用する付属器具で、針から定規の端までの距離をきめて、定規は布地をそわせればまっ直ぐに縫えます。

★定規を取付けるには、針板の右にある２個のネジ穴に定規を置いて針から定規の間の距離を適当に定め右図のように、ネジで固くとりつけ、縫物の端をこれにそろえて縫います。

第 35 図



三ツ巻の使い方

三ツ巻を取付けるには、まず針を最高部へ上げ押えをはずして取付けます。(第36図)

縁縫いをするには……

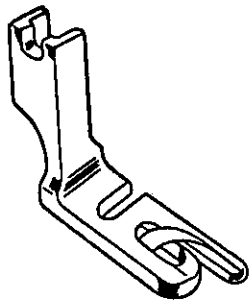
★三ツ巻をしようと思う布地のはし、約6cmぐらいの長さを、約2.5mm巾に2度折り曲げます。

★折った布地の端を三ツ巻の下に置き針を静かにさし、動かないようにして、2つに折った山を三ツ巻の渦の中に巻くように入れます。

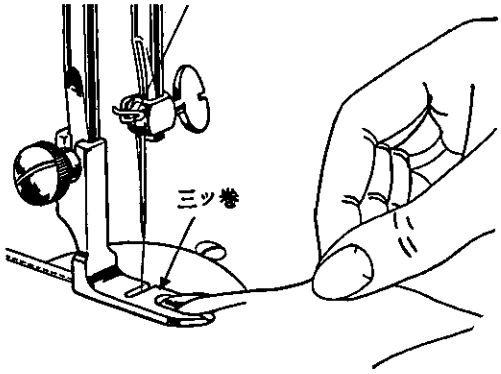
★押えを下ろして縫います。運針にしたがって、三ツ巻の中に布地が同じ巾で入るよう、右手で左右に動かして調節します。

★この三ツ巻には色々な利用法があり、縁縫いをしながらレースを同時に縫いつけたり、また伏せ縫い、重ね縫いなど、便利な応用が出来ます。

(伏せ縫い、重ね縫いは布地を中表に合わせて縁縫いをいたします)



第 33 図



カマ部の分解手入れ法

カマの部分はもっとも大切な個所で、ミシンの調子の悪くなる原因は、ほとんどこのカマに糸がまきつくことにありますから、カマの分解はぜひ出来るようにお覚えください。

◇ジャノメミシンには特にカマ掃除器(第38図)が装置されて、裁縫中カマに糸屑がたまることがほとんどなくなり、掃除の必要がないようになっていますが、万一カマに糸がまきつき、動かなくなりましたら、次の要領で分解してください。

★ジャノメミシンには、開閉カマ(オープンレース)が装置されていますから、分解はかんたんにお出来になります。

◇分解掃除のときクリーナーを落し忘れないようにご注意ください。

カマの分解順序

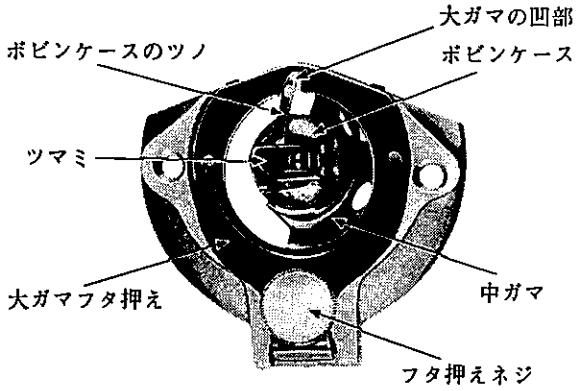
1. ベルトをはずして、頭部を後方に倒し、ハズミ車を廻して針棒を最高部に上げ、ボビンケースを取りだしておきます。
2. 大ガマフタ押えネジ(第 37図)を左へ廻すとフタ押えが前方に倒れ、大ガマフタが取りはずせます。(第37図、第38図)
3. 次に中ガマを取りはずして、大ガマの内側などに巻きこまれている糸をとり除きます。

★組立てるときは……分解の逆の順序で、針棒は最高部へ、中ガマは第37図のような状態にして、それぞれ取りつけます。

(注意) カマの分解順序は次頁第38図に図示してあります。

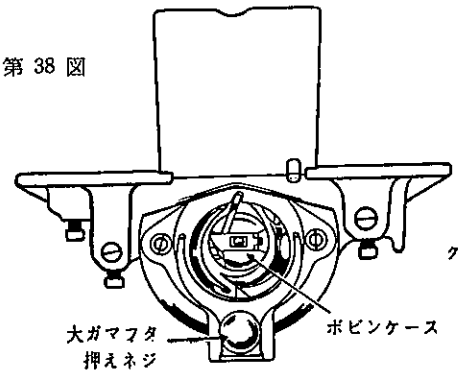
カマ部とボビンケースの名称図

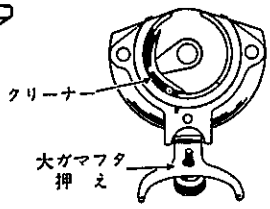
カマの分解順序

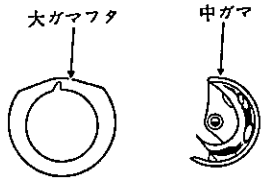


第 37 図

第 38 図







ミシンの故障の原因と修理法

故障が起りましたら操作方法が使用説明書通りであったか、また手入れが十分であったか……などを確めます。

次に故障の状態とその修理法をのべますがこの中で記されている方法で、なおらない場合には、直営支店に調整をお申し出ください。

特に必要以上に分解したり、ネジをゆるめたりしないで、すぐ調整を依頼するようにして下さい。支店ではみなさま方にご迷惑をかけないよう至急調整をしてさしあげることになっています。

(1) 音が高い、回転が重い場合

1. 油がきれている
2. 良くない油を使っている
3. カマ部に糸屑が巻き込まれている
4. 送り歯にゴミがたまっている
5. モーター内部の故障（支店調整員に確めてください）

(2) 上糸が切れる場合

1. 上糸のかけ方が間違っている。糸が必要外のところにからみついている
2. 上糸の調子が強すぎる
3. 針が曲っていたり針先が鈍くなっている
4. 針の取り付け方が間違っている
5. 針穴にキズがついている
6. 針い終って布を出す場合、向う側に布をひかなかった
8. 糸が針にくらべて太すぎる、又は細すぎる

(3) 下糸が切れる場合

1. ボビンケースに下糸の通し方が間違っている
2. ボビンケースの調子バネを強く締めすぎている
3. ボビンケースの中やカマの中にゴミがたまっている

4. ボビンの糸の巻き方が平均でない

(4) 針が折れる場合

1. 針の取り付け方が間違っている
2. 針が曲っている
3. 針止めネジの取り付けがゆるんでいる
4. 上糸の調子が特に強すぎる
5. 縫い終って布を出す場合、向う側に布を引かなかった
6. 布地に対して針が細すぎる
7. 布地に針がささっているときに、ダイヤル、レバーなどを無理に動かした

(5) 縫い目が飛ぶ場合

1. 針の取り付け方が間違っている
2. 針が曲っている
3. 針に対して糸が合っていない
4. 上糸のかけ方が間違っている

(6) 縫い目にシワがよる場合

1. 上糸又は下糸の調子が強すぎる
2. 上糸下糸のかけ方が間違っている
   (糸が必要以外のところにからみついている)
3. 布地に対して針が太すぎる
4. 布地に対して縫い目があらすぎる
5. ボビンの糸の巻き方が平均でない
6. 特に薄物縫いの場合には下側に紙を入れて縫った方が美しい縫い目になります

(7) 縫い目に輪が出来る場合

1. 上糸の調子が弱すぎる
2. ボビンケースの調子バネの強さが強すぎるか弱すぎる
3. 糸に対して針が適当でない

(8) 布送りが不十分な場合

1. 押え調節(ダーナー)の圧力が十分でない
2. 送り歯のところに糸屑がたまっている
3. ドロップのツマミの位置が適当でない

◇下の表の針の種類は……HA×1の何番とご指定になってお求め下さい。
◇布と糸と針との関係は「角板」表面にも刻印表示されてあります。

布地と針と糸の関係

布地の種類	針の種類	糸の番号
極く薄い絹、デシン、ボイル、モスリンなど	9 番	100番—150番 カタン糸 細絹糸
キャラコ、サラシ木綿、その他薄地木綿類	11 番	80番 100番 カタン糸 80番 絹糸
普通木綿、毛織物 セル、ネル、ラシャ類	14 番	60番 80番 カタン糸 50番 絹糸
厚い毛織物、厚手の木綿類	16 番	40番 60番 カタン糸

針の種類は
HAX1

ジャノメミシン

HL2—365型使用説明書

昭和41年11月 N

国内版第13版

蛇の目ミシン工業株式会社 発行